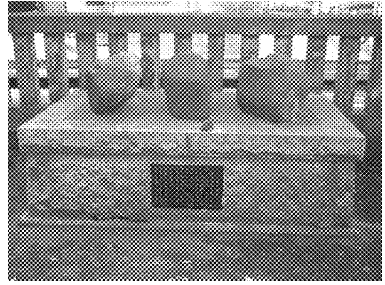


東村山の事件

「歴史の教科書には載らない庶民の歴史も書き残して置かなければならない」というコンセプトで、柳田国男は『遠野物語』を著わした。しかし、その巻頭言で「願わくは之を語って平地人を戦慄せしめよ」と柳田に言わしめた事件は、何も遠野郷だけで起こったわけではない。これは、過去を遡って記された東村山版遠野物語である。



秋津神社「石土」

一 『東村山』という地名の由来は、字の如く『村山』の東のほうにあつたからだが、その肝心の『村山』という地名の由来には諸説がある。だが、最も有力とされた「武蔵七党といわれた平安時代の武士団の一つである村山党の勢力圏であつたことから」という説は、すでに郷土史研究者によつて時代的矛盾が指摘されている。また、「小さな山が村のように点在」「村が共有する山の意味」の二説は、それを立証する資料が皆無である。

二 明治二十二年、野口村、廻田村、久米川村、大岱（のちの恩多）村、南秋津村の五カ村が合併して東村山村が誕生した。昭和十七年に町制、昭和二十九年に市制が施行されている。

三 現在の市域（二七・一七平方キロメートル）に相当する地区の人口は、十九世紀初頭の文化・文政年間頃には、戸数の記録のみで六六八戸、明治三十七年が六二五九人、昭和十七年が一万八五〇人、昭和三十九年が六万六〇二一人、そして現在（平成十九年三月一日）は十四万七三九九人である。

四 東村山市とは、「狭山丘陵の玄関口としての自然に恵まれた、鎌倉時代に軍事的・政治的に重要視された宿駅の一つで、建築物としては都内唯一の国宝・正福寺千体地藏堂を有し、JR・西武鉄道合わせて九つの駅がある、緑あふれ暮らし輝く文化都市」である。と役所と不動産屋は言っている。

五 鎌倉幕府の執権、北条時宗は、大勢の家臣とともに武蔵野に鷹狩りにやってきましたが、野口村（現在の野口町）まで来たところで突然重い病気に罹ってしまった。時宗は、自分は

殺生にやつてきたのだから死ねば必ず地獄に落ちるだろうと思ひ、死を覚悟しつつ地藏菩薩を拜んでいた。すると、ある夜の夢に黄色い衣を着た僧があらわれ、「私はこの近くの草庵に在る者です。あなたはあと三日の命ですが、この薬を飲めば助かります」と言つて時宗に丸薬を渡したところで目が覚めた。驚いたことに、夢の中で渡された丸薬が目の前にあり、それを飲むと嘘のように病気が治つてしまつた。これは地藏菩薩のお蔭に違ひないと思つて家来に探させるも、すぐ近くに千体地藏を祀つた小さな堂宇があつた。時宗はさつそく莫大な寄進をおこなつて立派な堂に建て替へさせた。それが現在の正福寺千体地藏堂である。ただし、国宝となつている現在の千体地藏堂は、時宗が建て替へさせた当時のものではなく、一四〇七年（応永十四年）に再建されたものである。

六 正福寺は、創建以来たびたび火事に見舞われているが、千体地藏堂だけは必ず焼け残っている。火事になるとどこからかおびただしい数の蟹がやつてきて、屋根に昇つて泡を吹き、火の粉を寄せ付けないのだという。また、千体地藏堂の欄間は波形で、昔はそこに蟹の彫刻が精細に彫つてあつたのだが、その彫刻の蟹が雨が降ることに一匹ずつ動きだし、ついには一匹もいなくなつてしまつたのだともいわれている。

七 正福寺の近くの渡辺家の座敷には、正福寺につながる抜け穴があつた。取り壊しの際に見た人の話によれば、赤土の層にやつと人が通れる程度の穴が開いていたという。正福寺

には昔、高僧や武士が泊まっていたといい、危険が迫ったときに逃げる抜け穴だったといわれている。

八 新田義貞が鎌倉攻めをした時、鎌倉街道の上ノ道をたどって東村山までやってきたが、九道の辻（現在の八坂交差点）に来たところで、何しろ道が九つに分かれているものだから迷ってしまった。部下を集めて詮議をしたために無駄な時間がかかってしまった。出発の際、義貞は村人に金を渡して、鎌倉街道の入口に目印として桜の木を植えておくように命じた。それ以来、その桜は『迷いの桜』と呼ばれ、代替わりしながらも長くその地にあつたが、いつしか世話をする人がいなくなつて枯れてしまつたという。

九 昔、秋津村（現在の秋津町）の村人数人が、豊作を祈るために神社にお参りをした。山を下りてふと谷川のほうを見ると、太鼓を背中に背負つて虎のふんどしをした赤や青の鬼が俵に水を詰めている。村人の一人がこわこわ「アニすんだや？」と聞くと、「この水を空から撤くと雹（ひょう）になつて落ちるので面白いのだ」という。それは大変だと思つたが、何気ない顔をして別の鬼に「雹の害を防ぐにやどうしたらよかんべえ」と聞くと、「神社の嵐除けのお札を立てなさい」と教えてくれた。それ以来、お札を挟んだ竹を立てた田畑には雹が降らなかつたという。田畑にお札を立てる習慣は現在でも続いている。

一〇 昔、柳瀬川の『曼荼羅淵』（久米川五丁目）の日本ボロオ研究所の裏手にあたる）には河童が棲んでいて、人間や馬にいたずらをする

るので村人たちは困り切つていた。ふだんは捕まったりすることはなかつたのだが、ある日のこと、その日は頭の皿が乾いてしまつたのか、それとも馬にでも蹴られたのか、ぐつたりしているところを村人に取り押さえられてしまつた。それ懲らしめるだのやれ殺してしまへなどと騒いでいるのを、持明院（所沢市北秋津）の和尚が見とがめて中に入つて、これからも悪さをするかと河童に聞くと言を横に振つた。それならばと、もう決して言はずらしないという証文を書かせて逃がしてやつた。この河童の詫び証文は明治十七年の火事の際に焼けて残つていないという。

一一 河童にまつわる神楽が、明治初期まで熊野神社（久米川五丁目）の祭礼で奉納されていた。旦那一人、馬鹿二人が登場し、旦那は馬鹿二人に魚釣りを命じる。そこで馬鹿が釣り糸を垂れると大きな獲物がかかり、二人がかりで釣り竿を肩に担いで引つ張ると一匹の河童で、馬鹿はびつくり仰天して腰を抜かしてしまふ。「お前は誰だ？」と聞くと、河童は「曼陀羅堂の河童だ」と宣言して大騒ぎとなるが、まもなく頭頭の皿が乾いて苦しみだす。河童は馬鹿に哀願して水をかけてもらつて息を吹き返す。独特の仮面を被つて演じるこの神楽は、特に馬鹿二人の仕草が滑稽で、見物席は爆笑の渦だつたというが、今はすたれて見ることができない。

一二 明治の廃仏棄釈運動のあおりでなくなるまで、南秋津村（現在の秋津町）には龍泉寺という寺があつた。この寺に丹波法印という片目の不自由な僧がいた。農民たちの悩み

を解決したり、寺子屋を開いたり、道路や橋や堤防の改修工事をおこなうなど、村人たちの指導者的役割を担っていたが、柳瀬橋の改修工事に着手してからももなく、突然の病でこの世を去つてしまつた。のちに柳瀬橋を木橋から鉄橋に架け替えた時、石垣にたくさんの蛇がいたが、その中に一匹だけ片目の蛇がいた。村人は丹波法印の生まれ変わりに違いないと信じて手を合わせたという。

一三 恩多の辻（恩多三丁目）から柳窪（東久留米市）に通じる道は『後家通り』と呼ばれていた。明治時代に、恩多の辻の三角地にあつた地藏尊と燈籠を、分教場を建てるために稲荷神社の隣にあつた大泉寺に移転したが、気が付くと通り沿いの家の主人が次々と亡くなつて、どの家も後家ばかりになつてしまつた。これはお地藏様を動かしたたりに違いないということで元の位置に戻すと、それ以来何も起こらなくなつたという。

一四 野口町一丁目の清正公様や猿田彦神社のある高台を『こんびら山』といい、その脇を通る志木又道の坂を『おんだし坂』という。車をうしろから押し出すようにしないと坂を登りきれなかつたために、そう呼ばれるようになったという。オランダが追い出しとも聞こえるため、縁起を担いで花嫁行列は決してこの坂を通らなかつたといわれている。

一五 北川の多摩湖町一丁目二十五番地付近にある橋を『信玄橋』という。昔、この場所に金の入つた信玄袋が落ちていて、落とし主を探したが見つからない。そこで村で協議した結果、この金を元にして橋をかけたのでそ

う呼ばれるようになったという。

一六 久米川町二丁目から恩多町五丁目に向かう江戸道の途中に『達磨坂』という坂がある。昔、この坂の上の観音の祠に奉納されていたダルマが、風に吹かれて坂下まで転がり落ちたからだという。

一七 恩多町四丁目の東村山高校と大岱小学校のあいだに『六兵衛坂』という坂がある。東側の中村家の六代前に六兵衛という人がおり、当時はこの付近に家が一軒しかなかったからだという。

一八 野火止用水の恩多町四丁目四十一番地付近に『三下橋』という橋がかかっている。橋のたもとに三左衛門と虎蔵という人が住んでいたためだという。

一九 柳瀬川の南側の秋津町五丁目付近の一部は『ドガドガ』と呼ばれている。特にこのあたりは段差が激しく、水が滝のようにドガドガと音をたてていたからだという。

二十 久米川町二丁目、青葉町二丁目、恩多町五丁目の境になっている一帯を『ハケ』というが、その一角に『ハケのおさる様』と呼ばれる庚申塔があり、近隣の人々の信仰を集めていた。いつも小豆や提灯、季節の花々などが供えられ、線香の煙が絶えることはなかった。三猿や桃の実を手にした猿などの絵馬がたくさん奉納されていた。このハケのおサル様は根つからの遊び好きで、時々姿を消してどこかへいなくなってしまう。下里（東久留市）や清水（東大和市）で見かけられることもあったが、いつの間にか元の場所に戻っている。それが、戦後のある時期からぶつ

りと姿を消してしまった。その行方を知る者は誰もいないという。

二一 現在の平和塔公園（本町一丁目）のある小山は昔は『大塚』と呼ばれ、狐穴がたくさんあることでも知られていた。明治の頃、九道の辻（現在の八坂交差点）の近くの隠居所に住んでいたある人は、三と八の付く日に所沢で開かれていた『市六斎』（三八の市）に行くた狐に、必ず何か食べ物を買って帰りに、大塚の狐穴に供えて、「おらあ、昼も夜もこの前を通りますだが、どうか化かさねえように願えます」と祈っていた。ある日、野口村西宿（現在の諏訪町）の本宅で嫁が台所の戸を開けると、軒下に一匹の狐が前脚をきちんと揃えてすわっていた。狐はしばらく嫁の顔をじつと見上げ、それからびよこんとお辞儀をす

ると去っていった。それから一時間も経たないうちに、隠居所から急病の知らせが届いた。大塚の狐が知らせにきたのだらうと人々は思ったという。

二二 野口村西宿（現在の諏訪町）の道下（現在の都宮住宅付近）から墓場山（前川の実来橋の西側一帯）にかけては、昔から『狐の嫁入り』がよく見られるところで、夜中にここを通った時に提灯行列を見たという村人がたくさんいた。

二三 人間が突然いなくなることや『神隠し』といい、子供を戒めるのに『神隠しにあうよ』と脅かすことがあるが、東村山地方では『隠れ座頭』『人さらい』『血とり』にさらわれるという言い方もしていた。戦前までは、特に八国山（諏訪町二・三丁目）、萩山（萩山町）

の牛ヶ窪、おさる山（青葉町）から伊豆殿堀（新堀川）にかけては非常に寂しいところで、子供たちだけで行くことは禁じられていた。

二四 大岱村（現在の恩多町）の金子という家の子供が行方不明になり、村中総出で探したが見つからなかった。何日かして、御岳山（奥多摩郡）で迷子として保護されたと連絡が入った。家人が急いで引き取りにいくと、何日間か飲まず食わずでいたらしく痩せ細っていたという。

二五 明治の初め頃、廻田村（現在の廻田町）の人が、九歳の男の子に青梅を持たせて国分寺まで使いに出した。先方は、梅のお返しにと油揚げをたくさん包んで、風呂敷に横背負いに背負わせて帰した。ところが夜になっても帰ってこない。大急ぎで国分寺に行ってみると、早い時間に帰したという。皆で何日も探したら、津田塾の山でやっと見つかった。が、子供の着物は食いちぎられ、持たせられた油揚げはもちろん、子供のお腹まで食われていたという。

二六 明治の初め頃、大岱村（現在の恩多町）では、裏山のムジナが小川を越えて毎晩やってくるので、山のようになっていることがよくあったという。何のためかはわからないが、村人は『ムジナのタメグソ』と呼んでいた。「ムジナは千人の股をくぐると人を化かせるようになる」とも伝えられている。

二七 ある年の秋、野口村北山（現在の野口町三丁目付近）に稲刈りに行った人が、稲刈りの手を休めて腰を下ろして一服していた。ところが、てっきり畦か丸太だらうと思ってい

た腰かけているモノが、突然もぞもぞと動きだした。驚いて飛び退くと大きな蛇の胴体だったので、一目散に逃げた。あとで戻ってみると、蛇の通ったあとと稲が倒されて、道のようになっていて続いていたという。

二八 明治十三年十一月十九日、日本史上最後の本格的仇討ちといわれた事件が東村山で起こった。前年の四月二十一日、大谷村（現在の恩多町）の稲荷神社の祭りの夜、柳瀬学校職員の高木千代三郎と稲熊の親分と呼ばれていた橋本熊三とのあいだで争いが起こったが、その後まもなく、仲裁に入った川上助左エ門の刃傷を受けた死体が発見された。熊本鎮台に陸軍軍曹として勤務していた息子の行義は、いったんは故郷の久米川村に戻って葬儀を済ませたものの、すぐに熊本鎮台に戻らざるを得なかった。その後、落ちていた刀の鞘を手がかりに猪熊の親分が調査したところ、犯人が高木千代三郎だとわかり、行義はさっそく上京しようとしたが、軍からの休暇の許可がどうしても出なかった。そこで仕方なく軍を脱走し、三ヶ月逃げ回った末にやっつと久米川村にたどり着いて高木に決闘を申し込みたい、秋津紅葉山（秋津四丁目）で仇を討つたのである。夜明けの光が射し込む頃、梅岩寺（久米川町五丁目）に引き上げて父の墓前に高木の首を捧げたあと、行義は警察に向かい自首をした。終身刑を言い渡されて網走刑務所に服役するが、四十三歳の時に恩赦で釈放され、出所後は自由党の壮士となって活躍した。梅岩寺には、明治三十六年に東京市長となった尾崎行雄が、行義あてに送った礼状が保管さ

れている。この事件は当時の新聞で大きく採り上げられ、「探偵実話・川上行義」「川上行義復讐新話」が出版されたり、行義を主人公にした芝居が全国で上演されたり、「川上騒動くどき節」という歌が大流行したことなどから、行義はたちまち全国的な有名人になってしまった。その重庄に耐えかねたのか、五十四歳の時につまらない喧嘩から友人を刺殺してしまい、再び刑務所に舞い戻った。懲役十五年の刑を終えて七十五歳で亡くなるまでの消息は一切わかっていない。

二九 紅葉山の事件は、当時十五、六歳だった当間丈の助少年にとって生涯忘れられない事件となった。行義は、高木の首を槍の先に付けて歌をうたいながら梅岩寺にやってくる、住職を起こして事の次第を報告し、裏の井戸で洗った首を父の墓前に供えたあと家に帰ったのだが、その途中、たまたま顔見知りで門前に住んでいた丈の助少年を叩き起こし、「高木のほうから首を取り返しに来るかもしれないから、朝まで番をしてろ」と言い付けたのである。夜が明けるやっつと、仇討ちのことを聞いた村人がやっつきたので少年は安心したが、まもなく大勢の人々が首を見物しにどつと押しかけ、大変な騒ぎになったことにまた驚いたという。

三〇 明治の頃、野口村西宿（現在の諏訪町）に住む遠藤若次郎という人が、夜中に何かの物音がしたので外に出てみると、二瀬橋の鉄橋の手前に蒸気機関車が止まり、提灯を掲げた工夫が線路を直しているのが見えた。何事かと思つて駆け出して行つてみたが、着いて

みると汽車も線路工夫も跡形もなく消えていた。ただ二瀬橋の下の水音が聞こえるばかりであつたという。

三一 ある紺屋の職人が酒を飲みに行った帰り道、ふらつく足取りで梅岩寺の辺りにさしかかると、すぐ近くに赤い鳥居が見えた。これ幸いといつかまつて休もうとすると、鳥居はツツと動いて先のほうへ動いた。近付いてまたつかまつるとすると逃げた。結局一晩中鳥居を追い回していたという。

三二 ある女性が得体の知れない重い病気にかかり、医者が見ても病名がわからず手当ての施しようがなかった。困った夫は、箱根ヶ崎（瑞穂町）の裏手にあつたという藤山に住む、当時評判の巫女にお伺いを立てたところ、巫女に神様らしき霊が乗り移り、「毎日毎日我が前を通りながら、一言の挨拶もない無礼な奴だ。これからでも挨拶にすれば病気は治してやろう」と言つた。夫はそれがどこの神様かわからず恩案の挙げ句、毎日畑に向かう道筋に小さな稲荷社があつたことに気が付き、早速赤飯を炊いて油揚げとともに献上したところ、病気は瞬く間に治つてしまつたという。

三三 川越の扇町屋にある稲荷は、占いがよく当たることで有名で、遠くからもお伺いを立てる人々がやっつてきた。ある人が占いごとをお願いに行つたら、今日は駄目なのだという。どうしてかと聞いたら、「今、うちのお狐様は、東村山の浅間塚のお狐様でお産があつて、見舞いに行つてるのでまたおいでなさい」と言われたという。

三四 久米川町の桜井家には古くから稲荷を

祀つてあるが、特に金銭の失せ物にはあらたかな靈験があり、一週間に内にはたいい見つかるといわれている。噂を聞き付けてお参りにやつてくる人も多く、それは現在も続いているという。

三五 大正の初め頃、人が死ぬと夜中に寺の戸にドカンと大きな音をたてて何かがぶつかり坊さんは目を覚まされるといふ噂があちこちで広まった。そこで野口村西宿（現在の諏訪町）の村人の一人が、徳蔵寺の義梅和尚に眞偽を尋ねにいった。すると義梅和尚は、『うんドカンとね。すると翌日は決まって死んだ沙汰があるもんだ。人が死ぬと魂が抜け出して、体よりも先に寺に来ちまうんだね』と眞面目な顔をして答えたという。

三六 廻田町の神山惣助という人が子供の頃、暑い夏の夕暮に、父親に畑の高台（富士見町四丁目）に煙草を忘れてきたので取つてきてくれと頼まれた。自転車で家を出て水路を渡り、南へ向かつていくと、遠くの二本松の上に十五夜のような満月が見えた。「あれ、この月は南だ」と思つて東の空を見ると、そこにもう一つ満月が出ていた。びっくりして南の空に目を移すと月は消えていたという。

三七 昭和八年、久米川町の青年団が軍事演習に参加し、夜中に歩哨として見回りをさせられた。すると突然、林の中に三〇個以上の赤い火がちらちらと点滅しはじめた。何事かと思つてこわごわ見ていると、一〇分間ぐらい続いて消えてしまったという。軍事演習にはほかの村の青年団も参加していたが、そんな奇怪な行動をとる筈はなく、狐の提灯がもし

れないとみんなで話し合つたという。

三八 正福寺の近くに住む渡辺宗太という人が、友人と一人で所沢に狩猟に出かけた。夕方になつて、荒幡の富士のそばの桑畑を通りかかった時、一人の女性が何かをしているのに出会つた。よく見ると、新巻鮭を背負つた女性が、束ねてある桑の縄を一生懸命にほどいている。おかしいなことをしていると思つた宗太が女性に近付くと、足元から狐が一匹飛び出してきたので鉄砲を撃つた。その音に驚いた女性はぼかんとしたまま、「私は今朝砂川を出て、北野へ歳暮の鮭を届けるのだが……」とぼそぼそ言つた。宗太は北野へ行く道を教えてやつたという。

三九 久米川町の榎本孫一という人が十七歳の頃、当時『かしならし』と呼ばれていた山のところで二人の友人に会つた。連れ立つて歩いていくと、遠くのほうで青い火が燃えているのが見えた。正体がわからないままにしばらく見ていたが、狐火は煙草を吸うと消えるという話を一人が思い出し、煙草に火をつけて吸つてから、ふつと煙を吐いたのと同時に、青い火がふつと消えた。「ありやあ狐だ。ホレ行こう」と言われ、夢中で柳沢の坂まですつ飛んで逃げたという。

四〇 ある夜、野口村西宿（現在の諏訪町）の清水清次郎という人が、親戚といつしよに祭りの相談に行つた帰りに、白山神社（久米川町四丁目）の鳥居を過ぎたあたりで、たぐさんの提灯が行列してやつて来るのに行き会つた。まるで本物の祭りのように、笛や太鼓を囃し立てていい調子だつたという。親戚は二面

白いから見ていくべえ」と言つたが、清次郎は「よく見ろ。人様の家の提灯にや家の名や屋号が書いてあるけど、ありやあ字がねえから狐だ。そんなもん見ると化かされてどうにかなつちまあから早く帰んべえ」とせかせたという。近くの石屋のうしろにお稲荷様があるので、そこのお狐様かなと思つたという。

四一 八坂神社（采町三丁目）のご神木は、樹齡三百年を超える杉の木で、その枝が社殿の一部に食い込んでいた。明治末期、屋根の葺き替えをする職人が邪魔になる枝を山刀（なた）で切り落とそうとしたところ、自分の腕を切つて大怪我をしてしまった。それ以来、ご神木のたたりを恐れて枝を切るうとする者がなかつた。そのため、昭和四十年の社殿新築の際には、社殿のほうをわざわざご神木から離して建てることになつた。しかし、古木で倒壊する危険もあつたため、やむなく神式に則つたお祓いをして先のほうだけを切り詰めた。この時はきちんとお祓いをしたためか、たたりのような事件はまったく起きなかつたという。

四二 八坂神社では、古くからたびたび丑の刻参りがおこなわれていた。真夜中に藁で作つた人形を五寸釘で木に打ち付け、人を呪い殺す儀式である。杉のご神木にも五寸釘のあとがたくさんあつたといわれるが、今は木の成長によつて判然としなくなつてしまつた。

四三 大正五年から昭和二年までおこなわれた村山貯水池（多摩湖）の築造工事では、大量の砂利とセメントが使われたが、セメントは東村山駅までは川越鉄道の貨車で、そこか

ら多摩湖までは軽便鉄道で運ばれていた。当時のセメントは竹のタガがかかった樽入りで、貨車からは歩み板の上を転がして下ろすのだが、その力の入れ加減がむずかしく、たびたび勢いがつきすぎてタガがはずれ、樽が壊れて東村山駅構内には大量のセメントがこぼれていた。駅の近くに住む人々は、一日に何度か「ああ、また溜まっただんべー」と塵取りや箒を持ってやって来て、好きだけセメントを手に入れることができた。そして申し合わせたように庭に池を作った。今でもその名残を見ることのできるという。

四四 通常 貯水池の取水塔は一つだけであるはずなのだが、なぜか村山貯水池（多摩湖）には二つ目の取水塔が作られている。飲料貯水池である村山貯水池は、水質の悪化を防止するために、堤防の中ほどに下層の水を抜くための穴が作られ、何日かに一度バルブを開けて湖底の水を放出する構造になっていた。その際には、バルブの上部に鉄の棒を十文字に渡し、それぞれの棒を四人の人間が抱え、力一杯回すことでやっとバルブが開閉するのであった。これはあまりにも重労働だということで、昭和五十年頃に、バルブの開閉をモーターの動力でおこなう機械が据え付けられた。ところが、バルブ開門の日が来て機械を作動させたところ、機械が突然故障してモーターが止まらなくなり、ついにスピンドルのネジ部分がつぶれて一ミリも動かなくなってしまった。そこで、下層の水を排出するための第二取水塔が作られたのである。

四五 村山貯水池 多摩湖が完成してから数

年後、東村山地方では、『鴨緑江節』の替え歌であるこんな歌が流行していた。

◆村山の山口境のあの貯水池は
二百五十戸も移転させ
八十五尺の土手を築き
今では都の遊園地

◆村山の山口境のあの貯水池は
鴨や魚が多けれど
取るに取られぬ禁猟区
ほんに浮き世はままならぬ

四六 明治二十七年に敷設された川越線（現在の西武国分寺線）には、昭和二十七年まで蒸気機関車が走っていた。戦時中に中央線沿線の軍需工場に通っていた東村山の人々は、疲れた体を癒す意味もあつてか、次のような『ラバウル小唄』の替え歌を帰りの車内で歌っていたという。

◆汽車にお乗りならゴイ線にお乗り
北は川越南はブンジ

金波銀波のムラヤマ恋し
可愛いあの娘の笑顔が浮かぶ

（ゴイ線／川越線／ブンジ／国分寺／金波銀波／多摩湖）／ムラヤマ東村山

四七 第二次世界大戦に五回遭っている。当時の東村山町は米軍の空襲に五回遭っている。そのほとんどは、陸軍の飛行場があつた所沢（向かう道路を寸断することを目的としていたため、おもに橋が数多くかかっていた柳瀬川沿いの一帯に集中している。昭和二十年四月二日未明の空襲の時には、大型爆撃機B29が秋津町の小俣家の畑（現在の秋津町一丁目）に墜落した。民家二十戸が破壊され、二戸が全焼、

町民三名が行方不明となった。B29の残骸の傍らには、十一名の米兵の焼死体があつた。

その中には通信兵たつたと思われる女性が一人いたが、現場に駆け付けた憲兵隊はその事実をなぜか異常に警戒し、女性の兵士がいたことは絶対に口外しないよう、村人に徹底指導してから引き揚げていったという。夜が明けると、何人かの村人がバラバラになつた死体を引きずり回していた。この光景を見れば小俣家の当主の権次郎は、「仏様になれば敵も味方もないじゃないか」とつぶやいて、米兵の遺体を集めはじめた。集まつた人々はしばらくそれを黙って見ていたが、誰言うともなくいつしか遺体を拾い集めるようになり、日本兵に見つからないようにと、菰に包んで秋津駅の北側にある花見堂の裏に埋め、遺品は軍に見つからぬように隠しておいた。戦後、権次郎は遺骨と遺品を掘り出して、駐留軍の担当者に引き渡して感謝状を贈られたという。

四八 久来川町の立河正時という人は、北支（中国の北部）から昭和二十三年に復員したが、その年の夏、保生園（現在の山手病院）の裏山へ盆花を採りに行ったら、大きな木の根っこのあるところに見慣れない稲荷の赤い祠があつた。子供の頃から駆けめぐって遊んだ山なのでよく知っているつもりだったが、「たぶん戦争中にでも祀られた新しい稲荷様なのだろう」と思って、採り集めた花を祠の前に置いてその場を離れた。新しい花を採ってしばらくして戻ったら、花だけが残っていて祠はなくなつていたという。

四九 昭和の中頃 浦和市に住む野崎アキとい

う女性が目を患っていたが、医者から回復の見込みはないと見離されてしまった。ある日、どこからかやってきた浮浪者風の男が、「東村山の久米川に小さい石祠があり、観音様が祀られている、これを一心に拝めば目は治る」と言つて去つていった。詳しい所番地を聞かなかつたため、彼女は何度も東村山に足を運び、やつとのことで達磨坂上の豊田家（久米川二丁目）に、小さいながら慈母観音が祀られていてのを知り、早速日参して一心に祈る目と目が治つてしまった。豊田家の慈母観音の堂内には、彼女が寄進した賽銭箱と鈴が奉納されている。

五〇 東村山市と聞いて思い浮かぶ有名人といえは、何をさて措いても志村けんである。ただし、彼が結果的にせよ「東村山市」という地名を残した功労者であることはあまり知られていない。一九七〇年代前半、東村山市の周辺では、町や村が合併して市制を施行したことで、新名称の市が次々と誕生していた。

「東村山」というのは明治二十二年から続く由緒ある名前だが、当時はあまりにも知られていない無名の市だったため、市名を改称してみんなに知ってもらおうという運動が一気に高まり、新市名を市民から公募して決めようというプランが立てられた。そこで突如として起きたのが、TBS『8時だよ全員集合』から広まった「東村山音頭」の大ブームである。あまりにも急速に「東村山」の名前が人口に膾炙されたため、今さら市名を変える意味がほとんどなくなつてしまった。知名度を高めてくれた功績に対し、東村山市は志村けん

んに感謝状を贈つた。市民栄誉賞を贈ろうという動きもあるが、何度も候補に名が挙がるだけでいまだに実現はしていない。彼がテレビ番組の中で歌つていた「東村山音頭」は、最初の三小節だけはオリジナルとだいたい同じだが、その他の部分はまったくの彼の作詞変曲である。正調の東村山音頭の歌詞は次のようなものである。

◆ 東村山庭先や多摩湖ソレヤレソレ
狭山茶どころ人情にあつい
茶のみばなしに花が咲く花淋咲く
(以下くりかえし)

チョイトチョックラチョイト
チョイトキテネ
よかつたらおいでよお茶いれる

◆ 関東八州八国山でソレヤレソレ
見ればうき世のころも晴れる
晴れりや富士ささえ薄化粧薄化粧

◆ 言わず語りに伊豆殿堀をソレヤレソレ
こえて逢う瀬をまた二瀬川
しのぶ久米川古戦場古戦場

● 参考資料 東村山市教育委員会『ふるさと昔語り』／東村山市教育委員会・文化財専門委員会『東村山民謡集』／東村山郷土研究会『東村山四方山話』一・二／東村山郷土研究会『地域に残る地名にまつわる話』一～三

● 解説 東村山というところは、取り立てて特徴のある町ではない。おそらく、正福寺千体地藏堂と志村けんがこの世に存在していなかったら、その名も人口に膾炙されることはなかっただろう。戦後、住宅・商業地域として発展したのも、典型的なベッドタウン化に伴

う結果に過ぎない。しかも、それを推進したのは自助努力ではなく、なぜか市内にたくさんの駅を作つてくれた西武鉄道のお蔭である。東村山市内には、いわゆる伝説、昔話、お伽話などといわれる、フィクションとしての魅力に満ちた物語はほとんど残っていない。その代わり、何々村の何兵衛さんが狐に化かされたといった類いの、さも事実であるかのような不思議な話は数多く残されている。もちろん、△△の『後家通り』の話は、おそらくコレラか何かの疫病のせいではないかと、△△の『ハケのおさる様』の話は、酔つ払つた若者が悪戯したのだろうとか、いろいろと科学的に推理することはできるが、それを逐一やつていたのでは途端に民俗学的味わいは失われてしまう。いずれにしても、これだけ魅力的な不可思議譚が数多く残されているというのは、東村山がまかり間違つても都会ではないことの証左だが、機能的文化都市を標榜しながら産廃処理場でダイオキシンを撤き散らしているとかの自治体よりは、よほどましなのではないだろうか。東村山市の二代前の市長は、市政・パンフレットに「目標の位置付けは田園調布」と書いて失笑を買つた。しかし、それに象徴されるいい意味での「脳天気さ」こそが、実はストレスばかりを抱えている現代日本人に最も欠けているものではないかという気もしてくる。偉大ではないが健全なる田舎都市「東村山」の風貌の一端にしみじみとしていただければ幸甚である。

● 編集 株式会社ココ・プライド出版事業部
「ココ・パピラス」